クリスティアン・トマジウスの実像

髙木 裕貴

1. はじめに

通常、哲学分野においてドイツ啓蒙といった時、モーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn; 1729-1786）やイマヌエル・カント（Immanuel Kant; 1724-1804）が活躍した 18 世紀後半が想起されることがほとんどであろう。特に、カントが 1784 年に『ベルリン月報』において発表した論文「啓蒙とは何かという問いへの答え」は、常に参照される古典と化している。

しかし、むしろこの時代は「後期啓蒙（Spätaufklärung）」に位置づけられる。例えば、ドイツ啓蒙主義研究の権威であるヴェルナー・シュナイダースは、ドイツ啓蒙主義を四期にわけている[1]。まず、1690 年以前から 1720 年頃までの初期啓蒙主義、1780 年頃から 1800 年頃までの後期啓蒙主義があり、そしてその間に位置する啓蒙主義最盛期の前半（1720-1750 年）と後半（1750-1780 年）である。このように考えた場合、少なくともカントは後期啓蒙主義に属する。

では、17 世紀にはじまる「初期啓蒙（Frühaufklärung）」は、どのようにして幕を開けたのだろうか。それは、「ドイツ啓蒙の父」と呼ばれる哲学者クリスティアン・トマジウス（Christian Thomasius; 1655-1728）による大学での事件であった。トマジウスは、ラテン語使用の伝統を当然視していた保守的なライプツィヒ大学において、ドイツ語を使用して講義を行うという宣言を含む講義要綱（programma）公告を掲示した。これがドイツ啓蒙主義の幕開けであったのだ。

ところが、トマジウスという人物には、国内外を問わず、これまでに十分な光が当てられてこなかった。実際に、講義におけるドイツ語使用という点以外、トマジウスの人生はほとんど知られていないのではないだろうか。また、仮にトマジウスがライプツィヒ大学で様々なスキャンダルに巻き込まれたという指摘がなされても、具体的な数々のスキャンダルについてはお茶を濁してすまされることが多い。ましてや、トマジウスの思想そのものは、ほとんど理解されていないのではないだろうか。このような状況に鑑み、本稿ではトマジウスの人生に迫る。この作業は、日本国内におけるトマジウス研究を促進するためにも、必要な作業であると考えられるからである。したがって、本稿はトマジウスという人物と人生の紹介を意図している。それゆえ、トマジウスの著作の内容や思想について紹介したり、論じたりすることは抑制しなけれ

[1] Schneiders[1990:41], 翻訳書 42-43 頁。

ばならないのだが、トマジウスの人生は波乱万丈であり、いかにも自身の思想が反映されているように思われるのである。

ただし、トマジウスの伝記を書くことには大きな困難がある。トマジウスの決定的な伝記は、国内外を見ても、存在しないのである。それはもちろん、トマジウスに関する直接的な資料が残されていないことがその理由として挙げられるだろう。実際、トマジウスの研究者でさえ、トマジウスの伝記を書くことは不可能であると吐露しているほどである[2]。しかし、本稿では可能な限りの資料を読み解いた上で、国内にトマジウスを紹介することを優先したい。本稿が日本国内におけるトマジウス研究のきっかけになれば幸いである。

本論に入る前に、本稿の方針を述べておこう。本稿では、多くの断片的伝記的テキストを網羅的に参照する。とりわけ貴重なのは、『神の法学』序文（dissertatio prooemialis）におけるトマジウス自身による自伝的記述である。伝記的な見解に一致が見られない点については、その差異をそのままに紹介しておく。また限られた文献にしか言及されていない情報については、その文献情報を示した。他方で、（例えば、トマジウスの生年月日のような）ほとんどの伝記がカバーしている一般的事実については文献情報を記していない。なお、トマジウスのみならず、当時の著作のタイトルは非常に長いが、本稿では省略して示す。

2. ライプツィヒ大学の私講師になるまで[3]

クリスティアン・トマジウスは、1655 年 1 月 1 日、当時著名だった哲学者であり、アリストテレス主義者であったヤーコプ・トマジウス（Jacob Thomasius; 1622-1684）とマリアの長男として、ライプツィヒに生まれた。

ヤーコプはライプツィヒ大学とヴィッテンベルク大学で学び、1643 年に前者で哲学修士号を獲得する。1653 年から 1676 年まで、ニコライ学校の校長を務めた。その後は 1684 年に死去するまで、トマス学校の校長を務めていた（Ahnert[2006:9], DBE[2008:16]）。また、ヤーコプはライプツィヒ大学の道徳哲学教授（1652 年[4]）、弁論術教授（1656 年）、そして 1659 年から死去するまで修辞学教授を務めた（Wundt[1939:142]）[5]。

---

[2] 例えば、グルネートは筆者との面談（本稿 9 節参照）において、トマジウスの伝記を執筆することは「不可能」であると語った。

[3] 本稿においてトマジウスの文献から引用する場合、本稿 7 節で紹介するトマジウス選集（*Christian Thomasius, Ausgewählte Werke*）の巻数をローマ数字で示し、頁数を算用数字で付す。

[4] DBE[2008:16]では、1653 年。

[5] ヤーコプの弟ヨハン（Johann Thomasius; 1624-1679）は 1640 年以降、ヴィッテンベルク、ライプツィヒ、イエナで学び、1648 年に法学博士を取得した。DBE[2008:16]参照。

ヤーコプは 1661 年から 1663 年の間、若きゴットフリート・ライプニッツ（1646-1716 年）に教えた（Fleischmann[1931:12]）。ライプニッツはヤーコプの下で学士号を取得した。哲学者としてのヤーコプは、物理学、論理学、形而上学、修辞学などに関する著作を残した[6]。ヤーコプはライプツィヒ大学の学長さえ務めた。マリアの父ジェレミアス・ヴェーバー（Jeremias Weber）はライプツィヒ・ニコライ教会の大助祭であり、神学教授であった。

ヤーコプとマリアは三人の子を儲ける。トマジウスには五歳下の弟ゴットフリートがいた（Fleischmann[1931:14]）。ゴットフリートはトマジウスの学者としての人生にとっても重要な人物となる。ゴットフリートは 1689 年にヴィッテンベルク大学で博士号を取得した後、ニュルンベルクに移り住み、医師となる（Fleischmann[1931:14, 27]）。トマジウスが 8 歳の時、母マリアが亡くなる。父ヤーコプは別の女性と再婚し、さらに七人の子を儲けたとされている（Fleischmann[1931:13]）。

トマジウスは幼少のときから学問を始め、14 歳で 1669 年にライプツィヒ大学の初等学年（Baccalaureus）へ進学し、哲学の勉強に励む。この時期に、フーゴー・グロティウス（Hugo Grotius; 1583-1645）の『戦争と平和の法』（1625 年）に関する父ヤーコプの講義を受けたことは大きな衝撃であったようである。またこの時期に、後述するバレンチ・アルベルティ（Valenti Alberti; 1635-1697）からも教えを受けている。1669 年の 11 月の時点で学士号を授与される。トマジウスは 1672 年 1 月には、17 歳で哲学の修士（Magister）を取得する。ちなみに、この年にザムエル・プーフェンドルフ（Samuel von Pufendorf; 1632-1694）の『自然法と万民法』（1672 年）は出版されている。

その後もトマジウスは二年間は哲学部に留まった後、法学部に入学するが、そのきっかけこそ、プーフェンドルフであった。トマジウスはプーフェンドルフの『一般法学基礎論』（1660 年）と『自然法と万民法』に出会う。ただし、それでもプーフェンドルフには不満が残った。ベックによれば、トマジウスは当初はルター主義者であり、神学なしで自然法の知識は成立するというプーフェンドルフに反対していたのである。そして 1675 年、ライプツィヒ大学法学部において、『ポンティウス・ピラートの不公平な判断について（De iniusto Pontii Pilatii iudicio）』と題した初の討論を行う（Lieberwirth[1955:9], Ahnert [2006:9]）。

[6] これらの他、ヤーコプにはいわゆる「剽窃」に関する論考もあり、これは本稿 7 節で紹介するヤーコプ全集の第七巻に収められている。

トマジウスは 1675 年のうちに[7]、ブランデンブルク領におけるカルヴァン派の大学、フランクフルト・アン・デア・オーダー大学[8]に進学する。トマジウスは、「家族は法学の勉強を完成するために筆者をフランクフルト・アン・デア・オーダー大学に送った［……］」（IV 4）と表現している[9]。ライプツィヒでは、指導を受ける教員同士がしばしば一致せず、トマジウスはやりにくさを感じていたようである。また、ライプツィヒでの友人との会話が無駄であると気付いたこともその一因である（IV 4）。フランクフルト大学では、後述のザムエル・シュトリク（Samuel Stryk; 1640-1710）や、ヨハン・レティウス（Johann Friedrich Rhetius; 1633-1707）の指導を仰ぐ。トマジウスは 1678 年に討論『穀物法について（De jure circa frumentum）』（pro licentia）（Lieberwirth[1955:9]）によって教授資格を得た。それから 1679 年に博士号（法学）を授与されるまで、トマジウスはグロティウスやプーフェンドルフの自然法論をフランクフルトにおいて友人に個人的に教授した。トマジウスはこのようにして「教えることで学ぶ（docendo discimus）」（IV 4）経験をしたと回想している。

この時期にトマジウスは、プーフェンドルフの『弁明（Apologia pro se et suo libro, adversus autorem libelli famosi）』（1674 年）を読んだことで自身の立場を大きく変えることになる。1673 年、ニコラウス・ベックマン（Nicolaus Beckmann; 1634-1689）とヨシュア・シュバルツ（Josua Schwarz; 1632-1709）はプーフェンドルフへの反駁書『新説集（Index quarundam novitatum）』を公刊したが、プーフェンドルフがこれに対抗して執筆したのが『弁明』である。この書を通じてトマジウスは神学と法学の分離を確信し、プーフェンドルフ主義者となる。

1679 年のうちにライプツィヒに戻ったトマジウスは弁護士として働くが、1682 年頃にライプツィヒ大学に戻り、自然法を教える私講師となる[10]。『神の法学』からは、トマジウスが弁護士としての人生に不満足であったことが伺える（IV 9）。周知の通り、私講師は現代日本における非常勤講師とは異なり、大学からではなく、学生からその都度授業料を直接受け取るシステムである。

---

[7] Schröder[1999:11], Dyck and Sassen[2021], Schneiders and Zurbuchen[2003:160]. ただし、トマジウスがフランクフルトに移ったのは、1676 年頃とする資料も存在する（Wundt[1964:22]）。オナートは、トマジウスがフランクフルトに移ったのは、先述の討論（『ポンティウス・ピラートの不公平な判断について』）の一年半後、すなわち 1676 年以降としている（Ahnert[2006:9]）。

[8] 1506 年に設立されたこの大学は当時、正式にはブランデンブルク大学フランクフルトと呼ばれていた。1810 年にブレスラウ大学と合併し、1991 年、ヨーロッパ大学ヴィアドリーナ・フランクフルトとして再生した。

[9] この移動は父ヤーコプの方針ではないかと推測する論者もいる（Lieberwirth[1953/1954:156], Ahnert[2006:9]）。他方でヴントは、この移動の理由はやはり明確ではないと指摘している（Wundt[1964:22]）。

[10] Beck[1969:248], Tonelli[2006:440]. トマジウスが弁護士と私講師をしていた正確な時期はわからない。少なくとも、先に弁護士として働き始め、後に私講師になるが、この両者を同時に務めていた時期がある、との理解が最も有力であろう。

なお、トマジウスは 1680 年にライプツィヒにおいて、同い年の女性アンナ・クリスティーネ・ハイラント（Anna Christine Heyland; 1655-1739）と結婚する。アンナは、ブラウンシュヴァイク・リューネブルク宮廷顧問官（Hofrat）であるポリカルプ・ハイラント（Polycarp Heyland）とロジナ・エリザベト（Rosina Elisabeth）の娘であった。ロジナはライプツィヒ市議会議員（Ratsherr）であるフィリップ・シュライナー（Philipp Schreiner）の娘である（Fleischmann[1931:14-15]）。トマジウスとアンナは、後に子どもを六人儲けている。1684 年に父ヤーコプがライプツィヒにて死去する[11]。

なお、多くの伝記的記述は、トマジウスはライプツィヒに戻る前に、オランダへの短い旅に出かけたと記録している（Lieberwirth[1953/1954:156], Beck[1969:248], Dyck and Sassen[2021]）。確かに、オランダは当時にあって学術的な興隆を極めており、トマジウスがオランダに興味を持っていたとしても不思議ではない。しかし、その信憑性には疑いが指摘されている[12]。ヴントは、トマジウスは、「改革された学問精神の源泉」であるオランダに向かおうとしたが、実現しなかったと書き残している（Wundt[1964:23]）。むしろ重要なのは、弟ゴットフリートが 1693 年からオランダとイギリスの旅行に出かけている、という指摘である（Fleischmann[1931:14]）。この旅は後にトマジウスに転機をもたらす。

3. ライプツィヒ大学での革命

ライプツィヒ大学に戻ったトマジウスは、この地でいくつかの「革命」を起こした。1687 年、わずか 32 歳の私講師であったトマジウスは、1687 年から 1688 年の冬学期に行う講義の要綱をライプツィヒ大学の講義公告掲示板[13]に掲載した。それは以下の通りである。

---

[11] 実は、トマジウスはライプツィヒ大学に帰ってからの数年間、父ヤーコプとは同僚であったことになる（Lieberwirth[1953/1954:156], Fleischmann[1931:15]）。また、リーバーヴィルトは、トマジウスがライプツィヒ大学に戻ったのはヤーコプへの気遣い（Rucksichtnahme）によると捉えられることがほとんどであると指摘している。

[12] おそらく、トマジウスがオランダに旅行をしたという最も古い記述は、最も古いトマジウスの記録の一つであるフライシュマンの著作に見られる（Fleischmann[1931:14]）。しかし、オナートとシュレーダーは、トマジウスがオランダに行ったという伝記的記述がしばしば見られるが、実はこれにはエビデンスがないとしている（Ahnert[2006:10], Schröder[1999:11, 163]）。確かに、筆者は、トマジウスがオランダに旅をしたという言明しか見かけず、オランダになぜ行ったのか、オランダで何をしたのか、などそれ以上の情報は見かけない。フライシュマンの資料においてもしかりであり、むしろゴットフリートのオランダ旅行の方がよく取り上げられている。トマジウスの書簡集を編集したグルネートは、筆者との面談（本稿 9 節参照）において、書簡の中にオランダに関する記述がまったく見受けられないことからトマジウスはやはりオランダには行っておらず、代わりに弟のゴットフリートをオランダに送ったのだ、と指摘している。さらに後述の『フランス人の模倣論』においてトマジウスは、かの講義要綱を掲載した時の自身を「一度も旅行したことのない、30 歳くらいの若い男」と回想しているのだから（XXII 53）、やはりオランダには旅行していないのだろう。

[13] リーバーヴィルトは、トマジウスは「法学者の特権」として、正確にはライプツィヒ教会の扉に掲載したと書き残している（Lieberwirth[1953/1954:156]）。

クリスティアン・トマスは、日常的な生活と振る舞いにおいてフランス人をいかに模倣すべきかという議論において、理性的に、怜悧に、行儀よく生きるというグラシアンの根本規則についての講義を、ライプツィヒにおいて学生青年諸君に開始する。

この講義でトマジウスが目を向けるのは、スペインイエズス会のバルタザール・グラシアン（Baltasar Gracián; 1601-1658）の『信託マニュアルと怜悧の技術（Oraculo manual, y arte de prudencia）』（1647 年）[14]という箴言集である。

この講義要綱は、当時において非常にセンセーショナルであった[15]。第一に、この講義要綱は、それ自体がラテン語ではなく俗語であるドイツ語で書かれたのに加えて、講義自体もドイツ語で行うという予告を含んでいたのである。自身が後に『フランス人の模倣論』に付した覚え書きによれば、トマジウスはその結果、「畏れ多い大学掲示板（ehrliches schwarzes Bret）を汚し、学術語（lingva eruditorum）としてのラテン語（lingva latina）を蔑ろにした」（XXII 53）とのかどで批判された。第二に、講義内容に目を向ければ、自国ドイツに対するフランスの優位を認めている。フランスとドイツを並べた上でフランスを上位に置き、ドイツ人はその文化を模倣すべきと主張したのである[16]。トマジウスは、百年の間、フランスの文化、その犯罪や病気までもがドイツで流行っていると指摘している（XXII 3）。

ヴァイグルによれば、このトマジウスによる講義公告という瞬間がドイツ啓蒙主義の始まりであるという点について、歴史家は一致している（ヴァイグル[1997:40]）。ラテン語が使用されるのが伝統であった大学において、トマジウスはドイツ語という民衆の言葉で講義を実施したのである。シュレーダーが指摘するように、トマジウスがかの公告を掲示した日が、マルティン・ルターが 1517 年に「九十五の論題」をヴィッテンベルクの教会の扉に貼ったのとまったく同じ日、すなわち 10 月 31 日であることは、偶然ではないだろう（Schröder[1999:29]）[17]。トマジウスは自分をルターに擬えて

[14] 本書は森鴎外、フリードリヒ・ニーチェ、アルトゥル・ショーペンハウアー、フランソワ・ド・ラ・ロシュフコーに影響を与えたと言われている。本書は後にショーペンハウアーによって、Handorakel und Kunst der Weltklugheit というタイトルでドイツ語に訳されている。さらに、本書にはショーペンハウアーのドイツ語訳、およびスペイン語の原文からの邦訳も存在する。

[15] この講義要綱は『フランス人の模倣論（Discours von der Nachahmung der Franzosen）』（1687 年）として 1701 年に『ドイツ語小論集（Kleine Teutsche Schriften）』に収められる。

[16] ただし、赤沢は、トマジウスは本書で単純な模倣を主張しているのではなく、「模倣」という表現の選択はすでにトマジウスの皮肉を表していると解釈している（赤沢[1987:9]）。筆者はこの解釈に同意するが、この点をここでさらに論じることはできない。

[17] ちなみに、トマジウスが後に活躍したハレ大学は、1817 年、ヴィッテンベルク大学と合併し、ヴィッテンベルクで教鞭を執っていたルターに肖り、「マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク」へと名称を変更している。トマジウスがルターを意識しつつ活動したハレ大学は、トマジウスの死後、ルターの大学となったのである。

いたに違いない[18]。ルターが新約聖書をドイツ語に訳したことでドイツ語が発達したことも知られるところである。シュナイダースが指摘しているように、ドイツ啓蒙は、政治的・宗教的出来事ではなく、地方での学術上の出来事がきっかけだったのである（Schneiders[1990:31], 翻訳書 29 頁）。つまり、ドイツ啓蒙は大学から始まった。

ただし、ベックは、トマジウスがはじめてドイツ語を使用して講義をしたという通説は間違いであると指摘している（Beck[1969:248]）。学生のラテン語能力に不満だった教授はすでにドイツ語で講義をしていたのである[19]。トマジウスの功績は、あくまでドイツ語の使用を「宣言」したことにある。他方で、ベックによれば、トマジウスははじめて講義中に剣を身に付けていた教授である（Beck[1969:249]）。ヴントによれば、これは後述する騎士アカデミーを意識してのことである（Wundt[1964:28]）。

では、当時のドイツ語使用はいかに位置づけられていたのか。赤沢によれば、17 世紀ドイツには言語使用について三つの潮流があった（赤沢[1987:3]）。第一に、「国語協会（Sprachgesellschaften）」のドイツ語浄化運動である。例えば、その一つである「結実協会（Fruchtbringende Gesellschaft）」は 890 人もの会員を擁していた。第二に、大学および教会におけるラテン語使用の伝統である。第三に、三十年戦争後ドイツ宮廷社会を中心に広がったフランス語使用の「ア・ラ・モード」である。このように当時は、ドイツ語使用推進派、ラテン語使用推進派、そしてフランス語使用推進派が混在していたのである。トマジウスは第一の立場に近いだろうが、ラテン語使用を排除しようとしているわけではない点においては、この立場から遠い[20]。

フランスにおいては、ルネ・デカルト（1596-1650 年）がすでに、ラテン語のみならずフランス語で執筆を行っている[21]。例えば、『方法序説』（1637 年）、『情念論』（1649 年）がそうである。つまり、これに後れを取っていたドイツにおいて、ラテン語でもなくフランス語でもなく、母国語、すなわちドイツ語で学術活動が行われることをトマジウスは望んだのである。フランス人の模倣を歌うトマジウスがフランス語ではなく、ドイツ語の使用を進めたのはパラドクシカルにも聞こえるが、赤沢がいみじくも指摘しているように、ラテン語ではなく、自分たちの言語を使用する、という点においてドイツ人もフランス人を模倣すべきと説いたのである（赤沢[1987:4]）。

---

[18] シュレーダーは次のように述べている。「トマジウスが改革者ルターにしばしば言及するという事実は、いわばドイツのための第二の革命者たろうとする意識的な自負を示している」（Schröder[1999:19]）。

[19] 福田いわく、パラケルスス（Theophrastus Paracelsus; 1492-1541）はすでにドイツ語で講義を行っていた（福田[2000:2]）。西村はトマジウスと同時代にもドイツ語で講義をしていた人物を四人挙げている（西村[1998:117]）。

[20] トマジウスは、ライプツィヒのドイツ語浄化運動を推進する協会、「ライプツィヒ弁論家協会（Leipziger Redner Gesellschaft）」に所属していた（成瀬[1988:101]）。また、トマジウスは、ドイツ語文章（作文）教室まで開いていたようである（赤沢[1987:13]）。

[21] トマジウスはデカルト自身の哲学は評価するが、それが権威化することを批判していた。

ちなみに、トマジウスの同世代人には先述のライプニッツがいる。宮廷人であり、国際人であったライプニッツは当時のドイツ国内における極端なフランス語使用を批判しているが、ライプニッツ自身はドイツ語で書くことがほとんどなく、むしろフランス語を使用していた[22]。対して、トマジウスは少なくともフランス語で執筆することはなかった。

これに対して、18 世紀に活躍したカントが著作を主にドイツ語で書いていることは知られるところである。また、カントより少し前にクリスティアン・ヴォルフ（Christian Wolff; 1679-1754）がドイツ語での専門用語を整備した。このはじまりはトマジウスであったのである。トマジウスは晩年にもラテン語でも執筆しているが、例えば、後述の『理性論入門』（1691 年）、『理性論実践』（1691 年）、『倫理学入門』（1692 年）、『倫理学実践』（1696 年）ははじめからドイツ語で執筆している。

さて、『フランス人の模倣論』の内容を少し見てみよう。もちろん、フランス人の模倣は、使用言語にのみ関するものではない。トマジウスは、フランス語表現をドイツ語に置き換えようとすることの困難さを認めつつ、フランス人の特質を以下のようにまとめている。

Un honnéte homme: ein ehrlicher Kopff
Un homme scavant: ein gelehrter Kopff
Un bel esprit: ein verständiger Kopff
Un homme de bon goust: ein kluger Kopff
Un homme galant: ein artiger Kopff　　（XXII 9）

これら各々の説明が『フランス人の模倣論』の大部分を占めているのだが、これら五つを身に付けている人物こそが「申し分ない賢明な人物（un parfait homme Sàge）」（XXII 48）なのである。このようなフランス人の理想をも模倣することをトマジウスは要求する。しかし、その動機を理解するには、トマジウスがドイツ人に欠けていると考えていたことを知る必要がある。

トマジウスがこの書の中で批判するのは、当時ドイツを席捲していたスコラ学者、そして彼らのペダントリー（Pedantrei）である。トマジウスはペダントリーなスコラ

[22] ライプニッツにもわずかながらドイツ語で書かれた著作がある。『ドイツ人への警告：その悟性と言語をよりよく訓練するために（Ermahnung an die Teutsche）』（1846 年公刊）と『ドイツ語の実行と改善に関する私見（Unvorgreifliche Gedanken, betreffend die Ausübung und Verbesserung der deutchen Sprache）』（1697 年執筆、1717 年公刊）である。『ドイツ人への警告』の成立時期は明らかではないとされるが、この点については赤沢がトマジウスとの関係において詳細な検討を加えている（赤沢[1989]）。また赤沢はライプニッツによる『フランス人の模倣者たちに（Auf die Nachahmer der Franzosen）』という遺稿中のエピグラムにも注意を促している（赤沢[1987:3]）。

学者を「学校狐（Schulfuchs)」（XXII 17）と呼んだ[23]。トマジウスによれば、彼らの哲学は煩瑣な抽象や思弁に終始し、もはや自己目的化しており、一般社会に役立たないものであった。むしろ哲学とは、世界に開かれたものでなくてはならず、世界において幸せを得るためのものでなければならない。そこでトマジウスは、閉鎖的で形骸化した大学（スコラ）の哲学を改革し、社会（世界）でも有用な知識や術を学生に身に付けさせようと考えた。大学を世界に開かせようとしたのだ[24]。そこでトマジウスが注目したのがフランスの宮廷（Hof）文化であった[25]。すなわち、フランスの宮廷人こそが模倣の対象だったのである。この意味でトマジウスの哲学は「処世哲学」、あるいは「通俗哲学」と形容されてもよいだろう[26]。

ペダントリーを批判するトマジウスが導入しようとするのがガラントリー（Galanterei）である。もちろん、トマジウスもガラントリーを一言で説明できるとは考えない。

> 私は、Monf. Vaugelas と Monf. Costar はガラントリーの性質を少なくともより正確に、より明確に表現したと思っている。つまり、ガラントリーとは、何かを知っているとか、何かを巧みになすとか、宮廷で一般に用いられる作法に従って生活するとか、悟性、学識、よき判断、優雅さ、楽しさといったものが混じり合っており、しかも、あらゆる強制、気取り、不作法なぎこちなさとは逆なものなのである。（XXII 15）

この点に関連して、『フランス人の模倣論』の次の年に出版された『宮廷哲学入門（Introductio ad philosophiam aulicam)』（1688 年）[27]では、トマジウスのスコラ学者批判は次の段階に進む。本書においてトマジウスは哲学を党派哲学（Sectirische Philosophie）と折衷哲学（Eclectische Philosophie）にわけ、スコラ学者の哲学を党派哲学として痛烈に批判している。学校・大学で支持されている哲学は党派哲学であり、宮廷で支持されている哲学こそが折衷哲学であった（II 53)。

---

[23] 「学校狐」という表現はトマジウスが初めて使ったわけではなく、当時の一般的な表現であったようである。これはフランス語の Pedant のドイツ語表現であり、「狐（Fuchs）」という表現が採用されたのは、狐とは騙す動物であると考えられたからである（Kühlmann[1982:337]）。なお、言うまでもなく反学校というスタンスはベルリン科学アカデミーの設立に協力したライプニッツにも見られる。

[24] このトマジウスの主張は、後のカントの「学校（Schule）」と「世界（Welt）」の二分法の先取りでもあることは言うまでもないだろう。

[25] 坂本は、このような講義内容は、宮廷において仕事を得ようとする学生の関心を引くためであったと指摘している（坂本[2021:179-180]）。それが私講師としての収入に直結するからである。確かに、この解釈を全否定することは難しいが、トマジウスの意図をこれだけに狭めてしまうことは避けられるべきだろう。

[26] これは、カントが強く批判する「通俗哲学」との関連において興味深い。

[27] 1710 年にドイツ語版が出版されている。

まず、党派主義者については、「ある教師の特定の学説にしがみついたままで、女性的な愛情と盲目な追従からこれを擁護する者たち」（II 49-50）と定義されている。具体的には、当時のライプツィヒ大学において中心であったアリストテレス主義、そしてデカルト主義は党派哲学の最たるものである。

対して、折衷哲学については、以下のように説明されている。

> ところで、私は以下のことを要求する哲学を折衷哲学と名づける。彼は一人の哲学者の発言だけに依存したり、一人の教師の言葉に誓いを立てたりしない。彼は様々な教師の発言や著作から、正しいことや善いものならすべて何でも自分の悟性の宝物館に集めずにはいられない。そして教師の権威について思いを巡らしたりせず、この学説やあの学説がしっかりと根拠づけられているかどうかについて自分で探求し、さらには自分のものを何か付け加える。したがって、他人の目よりもむしろ自分自身の目で見る。（II 50）

折衷哲学とは、何でも二つの立場を結合させたり、その中間に立ったりする、という意味ではない。折衷哲学とは、党派性に囚われず、だからといって党派を避けることなく、あくまで自分の悟性（理性）でもって考えた上で、様々な党派から取り入れるべきことは取り入れる、という姿勢である[28]。逆に、例えばアリストテレスという「権威」に従ってアリストテレスの学説に耳を貸すものは党派哲学者であろう。

トマジウスの折衷哲学は、しばしば指摘されるように[29]、約 1 世紀後にカントが主張した「自分で考えること（Selbstdenken）」を先取りしていると言っても過言ではないだろう。『フランス人の模倣論』や『宮廷哲学入門』のドイツ語版には、すでに「哲学する（philosophieren）」という動詞が散見されることも付け加えておきたい（II 49;53;54, XXII 31;62）[30]。以上のように、『宮廷哲学入門』は、「考え、理性的に推論するための怜悧に関する簡単な構想と概略」という副題からもわかるように、理性論（論理学）、そして啓蒙論なのである。

最後に、ライプツィヒ大学での革命としてもう一つ注目すべきは、一般向けの月刊雑誌『月刊雑話（Monatsgespräche）』（1688-1689 年）の発刊であろう。この雑誌は、ドイツ語で発行された最初の月刊学芸雑誌であると言われており、主に、軽快なタッチの書評で構成されている。創刊号（1688 年 1 月号）は、フランクフルト・アム・マインからライプツィヒへと向かう四人の男性が馬車の上で交わす会話で始まる。重要なのは、この雑誌が大学の学者ではなく、大衆に向けて作られたことである。最終号においてトマジウスは以下のように書き記している。

---

[28] 福田は、この折衷哲学という考え方はカントのアンチノミー論の先取りであると指摘している（福田[2000:6]）。

[29] ヴァイグル[1997:54], 福田[2000:6], Schröder[1999:22] .

[30] ただし、ドイツ語訳はトマジウスの筆によるものではない。

文芸共和国は健全な理性以外の主宰者を認めず、そこに生きる者は、いかなる国籍や身分であろうが、みんなお互いに平等である。というのも、この大きな社会に関係する事柄では、全員が同等の票を有しているからである。いや、ここでは票は数えられることもなく、それは常に健全な理性の基準によって計られ、すべての人に共通の悟性の秤でもって考慮されねばならない。(VI 1149)

トマジウスはこの雑誌によって、大学人のみならず、世界の万人に語りかけた。理性を備える限りでは誰もが「文芸共和国(respublica literaria)」の一員であるし、そうあるべきなのである。

この歴史的な雑誌の発行により、トマジウスは「ドイツ・ジャーナリズムの父」(Beck[1969:248])や「ドイツ・ジャーナリズムの確立者」(Borinski[1894:86])とも呼ばれるようにまでなる。『月刊雑話』のモデルはフランスのピエール・ベールの『文芸共和国便り(Nouvelles de la rèpublique des lettres)』(1684-1687 年)であると言われるが(赤沢[1998:25])、これもフランス人の模倣と言うこともできよう。また、本雑誌は、後の『ベルリン月報(Berlinische Monatsschrift)』(1783-1796 年)の先駆けでもある。この一般向けの啓蒙雑誌上でメンデルスゾーンやカントが啓蒙をめぐるいくつかの有名な論考を掲載したことは有名であろう。

4. ライプツィヒ大学からの追放

トマジウスのライプツィヒ大学における革命的な出来事は、当時にあって直ちに受け入れられたわけではない。実際、大学におけるドイツ語使用は、保守的なライプツィヒ大学においてはスキャンダラスな事件にすぎなかった。神聖な大学掲示板の冒涜とさえ捉えられたのである。さらに、トマジウスは他のいくつかの論争に巻き込まれてしまう[31]。

まず、1685 年にトマジウスは『重婚罪について(De crimine bigamiae)』を発表するが、先述したライプツィヒ大学神学部教授アルベルティと重婚罪をめぐって対立する[32]。トマジウスはこの書の中でプーフェンドルフ的な立場を取り、一夫一妻制は自然法によって命じられているのではないと論じている。プーフェンドルフの批判者であるアルベルティはこれを快く思っていなかった。

続けてトマジウスは自然法講義の教科書として、『神の法学(Institutiones iurisprudentiae divinae)』(1688 年)[33]を出版する。具体的には、アルベルティの『正統派神学に従った自然法の概要(Compedium juris naturae orthodoxa theologia conformatum)』(1678 年)のような批判に対して、プーフェンドルフの自然法論を擁護

[31] 本節は Ahnert[2006]の第一章に多くを負っている。
[32] アルベルティはプーフェンドルフに反対する典型的なルター主義者であった。
[33] 同年にドイツ語版が出版されている。

することがその目的であった。しかも本書の副題ではアルベルティを名指ししている。この書でトマジウスは特に結婚に多くの紙幅を割き、重婚は自然法ではなく、神の実定法によって禁じられるという、先述の『重婚罪について』と同様の議論を展開している。この主張がアルベルティの怒りを買ったのである。

さらに、先述の『月刊雑話』の発行も多くの問題を含んでいた。まず、トマジウスはドイツ語で執筆した著作をライプツィヒ大学に提出する。ところが、大学はドイツ語の著作は検閲できないと答えた。こうしてトマジウスは、『月刊雑話』という雑誌の出版という形でドイツ語での出版を実現させたのである[34]。その中でトマジウスは、のびのびとアリストテレス主義やルター派などを痛烈に、そして風刺的に批判している。名指しでこそないが、トマジウスが批判したのは明らかにライプツィヒ大学の教授陣であった。さらにその多くは、父ヤーコプの友人であった（Ahnert[2006:10-11]）。中でもヨハン・カルプツォフ（Johann Benedict Carpzov II; 1639-1699）は、ヤーコプの葬式において弔辞を述べたとされている（Fleischmann[1931:28-29]）。また、当時のライプツィヒ大学はルター派の牙城であり、神学者の反発は避けられないものであった。こうして、『月刊雑話』も二年後には大学哲学部によって上級宗教局（Oberkonsistorium）に訴えられ、短い命を終える。『月刊雑話』は、1688 年 1 月、ライプツィヒにて発刊されるが、ライプツィヒでの発刊が困難な状況になったのだろう、3 月以降はすでにハレの出版社 Salfeld から発刊されている（Schröder[1999:23, 26]）。

また、『プロテスタント宗教が王に与える利益について（Interesse principum circa religionem evangelicam）』（1687 年）を著したコペンハーゲンの宮廷付説教師、ヘクトール・マジウス（Hector Gottfried Masius; 1653-1709）との論争にも巻き込まれてしまう。マジウスは、カルヴァン派と異なり、ルター派のみが王に対する従順の義務を認めていると考えた。これに対してトマジウスは、1688 年 12 月『月刊雑話』上で、王の座（maiestas）は直接神から導出される、というマジウスの説に名ざしで反論した。これが引き金となり、オランダ王はザクセン選帝侯に苦情を申し入れた。結果として、トマジウスは原稿を出版する際には、事前に原稿を検閲に出すことを命じられ、またマジウスに書簡を送るのを禁じられる[35]。

さらに、トマジウスは当時、敬虔主義運動にシンパシーを寄せていたが、ルター派である大学の神学部は敬虔主義運動には反対の態度であった。父ヤーコプも敬虔主義者であり、ヤーコプの教えを受けたトマジウスは、当時ライプツィヒで聖書研究会

[34] トマジウスが元々出版しようとした原稿は、後に『理性論入門』として出版される。

[35] 『教会問題においてプロテスタント諸侯の権利がもつ三重の救済（Dreyfache Rettung des Rechts evangelischer Fürsten in Kirchen-Sachen）』（1701 年）所収の『神学論争におけるプロテスタント諸侯の権利（Das Recht evangelischer Fürsten in theologischen Streitigkeiten）』では、トマジウスとライプツィヒ大学神学部やマジウスとの対立について述べられている。リーバーヴィルトによれば、後者の論考は元々1697 年に出版されている（Lieberwirth[1955:59]）。なお、マジウスとの論争については Grunert[1997]が詳しい。

（Collegia phiobiblica）を開催していた敬虔主義者アウグスト・フランケ（August Hermann Franke; 1663-1727）と親交を結んだ[36]。聖書研究会は、当時大学神学部が無視していたギリシア語とヘブライ語を再評価し、聖書の文章を文献学的に分析しようとする試みであった。この親交ゆえにトマジウスは敬虔主義の創始者であるフィリップ・シュペーナー（Philipp Jakob Spener; 1635-1705）の著作を知り、1685 年以降本人と書簡を交わすまで至った。シュペーナーは 1688 年、ドレスデンの宮廷付説教師となる。この時期にフランケはシュペーナーと出会う。シュペーナーはその後にルター派と対立し、1691 年にザクセンを去り、ベルリンのニコライ教会の牧師となる。

ルター派が主流のライプツィヒ大学においても、この聖書研究会の導入は歓迎された。ところが、この研究会は段々と文献学的な傾向がなくなり、神学的な色合いが強くなっていく。大学はこの点に難色を示した。さらに大学側は、フランケ自身が神学の学位を持っていなかったことを問題視し、段々とフランケに圧力をかけていく。また、神学教育において哲学を強調しすぎる神学部の方針に反発したフランケはライプツィヒ大学神学部との対立を深めた[37]。しかし、それでもこの時点では両者の溝は決定的なものではなかった。

神学部と敬虔主義者の溝を決定的としたのは、トマジウスも関係する別のある事件であった。フランケは神学部教員による敬虔主義者の秘密集会への取り調べに関係する書類を閲覧する機会を得たのだが、その際にトマジウスを連れて現れた。フランケはトマジウスのアドバイス通り、当該書類を書き写し、それを後に公にした。これは当然問題となったが、その際もトマジウスはフランケを擁護した。続けてフランケとトマジウスの各々は、ライプツィヒ大学神学部を批判する論文を執筆した。トマジウスのそれは『ライプツィヒ大学の審理に関する法的思考（Rechtliches Bedencken über die Leipzigschen Universitätsakta）』[38]（1689 年）である。加えてトマジウスは、『先入見について（De praejudiciis）』と題した講義[39]の中で、正教会聖職者の説教を批判した。これを受けてライプツィヒ大学神学部は、ドレスデンにあるザクセン選帝侯に不満を訴えた（Ahnert[2006:11]）。先述の様々な事件があったのだから、トマジウスはフランケと比べても不利な状況にあった。はじめは、選帝侯ヨハン＝ゲオルグ三世（1647-1691 年。在位：1680-1691 年）はトマジウスに好意的であったが、1690 年 3 月 10 日には、敬虔主義者の秘密結社を禁止し、実質上敬虔主義者をザクセンから追い出すことになる。

---

[36] 聖書研究会のもう一人の主要メンバーは、パウル・アントン（Paul Anton; 1661-1730）である。

[37] この対立の結果、神学部の学生が哲学の講義を放棄することになったが、その学生の中には後述のランゲがいた（Ahnert[2006:13-14]）。

[38] Lieberwirth[1955:23], Ahnert[2006:14].

[39] これは 1689 年の講義であり、後の『理性論入門』の一章となった。

さらに、トマジウスは他人の結婚騒動にまで顔を突っ込むことになる。1689 年 6 月、ザクセン選帝侯の親戚筋にあたるザクセン＝ツァイツ公モーリッツ＝ヴィルヘルム（1664-1718 年）は、ルター派でありながら、ブランデンブルク大選帝侯フリードリヒ＝ヴィルヘルム（1620-1688 年。在位：1640-1688 年）の娘（後述するフリードリヒ三世の妹）で、メクレンブルク＝ギュストロウ公カール＝ヴィルヘルム（1664-1688 年）の未亡人である、マリエ・アマリア（Marie Amalie; 1670-1739）と結婚した。ブランデンブルク家はカルヴァン派に改宗していた。すなわち、これは異なる宗派同士の結婚だったのである。ザクセン選帝侯家はこの結婚に反対であった。しかし、ザクセン側につくべきトマジウスは『結婚と良心の問題の法的な解決（Rechtmäßige Erörterung der Ehe- und Gewissenfrage）』[40]（1689 年）という論文まで執筆してこの結婚を擁護した。このような態度は現代ではトマジウスの先駆的な「宗教的寛容」として紹介されるが、この行動は選帝侯の怒りを買ってしまう。

以上からみてとれるように、常に改革者たらんとしたトマジウスであったが、その行動は保守的なライプツィヒ大学の顰蹙を大いに買った。その結果、1690 年 3 月 10 日トマジウスはザクセン選帝侯によって教授活動と執筆活動を禁止され、免職処分に至る。ついに宗教裁判まで起こされ、逮捕の可能性まで出てきたトマジウスは 3 月 18 日にはライプツィヒを去る[41]。

周知のように、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（1744-1797 年。在位：1786-1797 年）によって、カントは宗教に関する講義や原稿の出版を禁止されてしまい、それに従った。これはカントのいう「理性の公的使用」の敗北であっただろう。カントは沈黙してしまったのである。これに対して、トマジウスはカントと同様の問題に直面したにもかかわらず、理性の公的使用を断念することはなかった。この意味でトマジウスは、やはり「啓蒙の父」であった。

5. ハレ大学にて

ライプツィヒを去ったトマジウスは、寛容国家ブランデンブルク＝プロイセンの首府ベルリンにおいて、カルヴァン派の選帝侯フリードリヒ三世（1831-1888 年。在位：1688-1713 年。1701 年、プロイセン王フリードリヒ一世）の要請を受け、ハレに向かう。

選帝侯がトマジウスを厚遇した理由はいくつか指摘されている。まず第一に、プーフェンドルフのサポートがあったという説が濃厚である（Dyck and Sassen[2021], 成

[40] Lieberwirth[1955:24], Ahnert[2006:130], Schröder[1999:13].

[41] ブロッホは、トマジウスがライプツィヒを去った時、ドレスデンにおいて自身への逮捕状が出ていたことを知らなかったと指摘している（Bloch[1953:15]）。他方で、リーバーヴィルトは、ドレスデン国会公文書館には、トマジウスに逮捕状が出ていた記録はないと指摘している（Lieberwirth[1953/1954:159]）。

瀬[1988:102]）[42]。トマジウスは、1686 年頃からプーフェンドルフと書簡を交わす仲になる。この背景には、先述した弟ゴットフリートの暗躍がある。ゴットフリートは 1685 年にオランダとイギリスへの旅からライプツィヒに帰り、トマジウス一家宅に一年間ほど住んでいたとされる（Fleischmann[1931:15]）。ゴットフリートはオランダにおいてプーフェンドルフと知己を得ていた。このつながりがトマジウスとプーフェンドルフをも繋げたのであろう。

トマジウスはハレに向かう以前の 1688 年頃から、ブランデンブルク領の大学に移動することを模索していたようである（Ahnert[2006:12], Schröder[1999:13]）[43]。例えば、プーフェンドルフはトマジウスに、フランクフルト・アン・デア・オーダー大学のレティウスはトマジウスを受け入れる可能性があると書き送っている（Ahnert[2006:12], Lieberwirth[1953/54:159], Schröder[1999:14]）[44]。プーフェンドルフとレティウスは、ブランデンブルク領に属するデユイスブルク大学もトマジウスの移動先のもう一つの候補として考えていた（Ahnert[2006:12], Schröder[1999:14], Lieberwirth[1953/1954:159]）。

他方で、まさにトマジウスがライプツィヒを発った日に、ザクセン＝ツァイツ公は、自分の結婚を擁護してくれたトマジウスを賞賛する書簡を親戚である選帝侯に送ったとされている（Ahnert[2006:15], Schröder[1999:15], Lieberwirth[1953/1954:159]）[45]。1690 年 3 月 22 日にはトマジウス自身も選帝侯に書簡を送ったようである（Ahnert[2006:15]）。それゆえ、先述の結婚問題においてトマジウスが選帝侯の妹を擁護したことがトマジウスの厚遇をもたらした、という説も説得力をもつ（成瀬[1988:102]）。これらが功を奏したのか、1690 年 4 月 4 日には選帝侯フリードリヒ三世から参議官（Rat）に任ぜられ、新大学設立のため、ハレに向かう。

さて、トマジウスのハレにおける教授活動は、ブランデンブルク大選帝侯によって設立された騎士アカデミー（Ritterakademie）においてはじまった。トマジウスはここで哲学と法学を教えた。騎士アカデミーは、ギムナジウムや大学のような、まさにスコラ的な教育機関とは異なり、貴族専用の教育機関として、実践的で役立つ学科を教

---

[42] 1689 年 8 月 7 日付プーフェンドルフからトマジウス宛書簡では、手段が整う前にハレに来ることは賢明ではない、と警告している（Pufendorf[1996:246]）。同年 8 月 28 日付の書簡では、収入がある限り、ライプツィヒでうまくやっていけるとアドバイスを伝えている（Pufendorf[1996:247]）。

[43] 1688 年 10 月 16 日付プーフェンドルフからトマジウス宛書簡（Pufendorf[1996:208]）。この書簡の中では早くも「ハレ」が言及されている。リーバーヴィルトやシュレーダーは、トマジウスが結婚問題についてブランデンブルク側を擁護したのは、そもそもブランデンブルク領に移動するための打算によるのではないか、と指摘している（Lieberwirth[1953/1954:158], Schröder[1999:14-15]）。この書簡の日付はかの結婚問題が勃発する以前であるから、この解釈も不可能というわけではないだろう。

[44] 1688 年 12 月 1 日付プーフェンドルフからトマジウス宛書簡（Pufendorf[1996:223]）。

[45] フライシュマンは、この時期にトマジウスはツァイツ公を訪ね、他方で自身に近しい人に自身の不幸を伝える手紙を送っていたと書き残している（Fleischmann[1931:32]）。

えていた。具体的には、馬術、フェンシング、球技、ダンスに加え、（ギリシア語やラテン語ではなく）フランス語、イタリア語、スペイン語、英語などの近代語、そして数学、自然科学、人文科学などが教授された。その意味では、騎士アカデミーは、トマジウスの反学校的な姿勢と合致していた。

1691 年 3 月、トマジウスはブランデンブルク領のマグデブルグ公国の政府に提案書を提出した。提案書に目を通した選帝侯はこれに同意し、1694 年、騎士アカデミーは、ドイツ初のプロテスタント近代大学として、ハレ大学に姿を変える[46]。そこでトマジウスは教授を務める。正確にはハレ大学の設立は 1694 年 7 月 1 日であるが、トマジウスはすでに 1691 年 8 月の設置令から教授活動を始めている。トマジウスはこの時期ではハレ大学唯一の教授であったが、すぐさま 50 人の学生を呼び寄せるのに成功した。当初は民間の建物で講義が行われたが、学生数が増えると、トマジウスは市議会に、市が所有する貨物計量所のホールを提供し、さらにそこに教壇を拵えて欲しいと要望した（ヴァイグル[1997:64]）。市はこれを承諾したが、ホールは家畜商や旅芸人にも使用されるという条件付きであった。この条件に不満を感じたトマジウスは選帝侯に直接訴え、自身の講義室を確保した。

1692 年には先述のフランケがハレに牧師として赴任してくるが、トマジウスはベルリン宮廷に働きかけ、フランケをハレ大学の東洋語（ヘブライ語）教授に斡旋し、さらに同年、フランクフルト時代の師であったシュトリクもハレ大学に斡旋した（成瀬[1988:77-78], Schröder[1999:18]）。トマジウスはフランケを自身の告白者として選んでいる。1695 年以降多くの孤児を引き取っていたフランケは自身の孤児院を作るが、常に多額の寄付を必要とした。そこでフランケは金策に走り、ついにハレで寄宿制高等学校（Paedagogium）を設立した。これは敬虔主義運動の中心地となる。フランケは 1698 年にはハレ大学神学部教授に就任する。9 月 19 日にはフランケの学校はハレ大学の附属となり、選帝侯の直接的な管轄下に入る。

ところが、後にトマジウスはフランケが実践する教育に反対するようになり、『ハレ・グラウチャにおける寄宿制高等学校の設立に関する報告（Bericht von Einrichtung des Paedagogii zu Glaucha an Halle）』（1699 年）という論文まで発表する[47]。トマジウスは、生徒の日常生活を規則によって支配するフランケの教育方針は、外面的ではなく、内面的によき敬虔主義者を育てることができないと考えたのである。こうして、ついに両者には亀裂が生じる。さらに、敬虔主義と決別したトマジウスはハレの敬虔主義者たちとも対立してしまい、神学部はベルリンに訴える。その結果、トマジウスは彼らに迷惑をかけないように、そして敬虔主義者たちはトマジウスに個人的な攻撃を加えないように命じられる(Beck[1969:253])。両者はこの命令に厳格に従うことはな

[46] Dyck and Sassen[2021], Beck[1969:249]. 前者は設立された大学を「フリードリヒ大学」と呼んでいるが、ハレ大学は当時このように呼ばれていた。ヴァイグル[1997:62]も参照。
[47] Dyck and Sassen[2021], Lieberwirth[1955:63].

かったが、それでもそれ以上の問題は起こらなかったようである。その証拠に、1709年には、ライプツィヒ大学に戻らないようトマジウスに思い留まらせるため、ベルリンは枢密参議官（Geheimrat）という称号を与える。

また、この時期について特筆すべきは、『魔術の罪について（De crimine magiae）』（1701年）の公刊である。トマジウスはこの書で魔術、ひいては魔女の存在を否定し、魔女裁判を批判した。このようなトマジウスの主張は無神論者との誹りを受けるものであったため、翌年、批判に答えるため大学での講義をもとに覚書を発表する必要が生じた。さらに、1713年の討論『妾について（De concubinatu）』[48]でトマジウスは、結婚の目的はあくまで子孫を残すことであり、妾の使用は結婚契約に違反しないと主張し、激しい議論を呼んだ。

さて、ここであらためてハレ時代の主要著作を紹介しておこう。トマジウスはハレにおいて重要著作を立て続けに発表する。『理性論入門（Einleitung zu der Vernunftlehre）』（1691年）、および『理性論実践（Ausübung der Vernunftlehre）』（1691年）は、端的に言えば、理性の使用法を主題とする。

『理性論入門』というタイトルは非常に素朴だが、その副題は「その中では、三段論法なしに、真実なるもの、蓋然的なもの、および誤れるものを相互に区別し、新しい諸真理を見出す方法が、身分や性別を問わず、およそすべての理性的な人々に対して、平易で理解可能な仕方で示される」となっている。ここでは、まさにスコラ的な三段論法への批判、そして身分や性別に関わらない万人の理性への訴え、という、いかにも啓蒙主義者トマジウスらしい姿勢が伺える。この点では、“Vernunftlehre”は「論理学」というよりはやはり「理性論」と理解されてしかるべきであろう。

また、倫理学については、『倫理学入門（Einleitung zur Sittenlehre）』（1692年）と『倫理学実践（Ausübung der Sittenlehre）』（1696年）を執筆している。前者の副題は、「幸福で、ガラントで、楽しい生活を達成する唯一の方法としての理性的かつ有徳に愛する技術について」である。この技術は本文において端的に、「理性的愛」と呼ばれる。トマジウス倫理学の基本概念は「理性的愛」なのである。ただし、それはあくまで幸福やガラントリーを実現する手段として考えられている。

ここで注意しておきたいのは、これらの著作ははじめからトマジウスの筆によってドイツ語で書かれた、という事実である。トマジウスは後に自然法の書をラテン語で書いているのだから、これらの四つの書はあえて一般市民に向けて書かれたものであると言ってよかろう。

ヴントによれば、『理性論』の二部は1699年から1719年までにさらに四版を重ね、『倫理学』の二部は1726年までに六版から七版を重ね、これらすべては後にラテン語

[48] 本討論は1714年に活字化され、出版されている（Lieberwirth[1955:113]）。トマジウス選集XXIV巻所収。

に訳された（Wundt[1964:37]）。また、理性論であれ倫理学であれ、入門編の後に実践編が続く点は、まさに実生活での有用性を主張するトマジウスの真骨頂である。特に理性論の二部構成はトマジウス以降の哲学者に引き継がれる。

また、トマジウスの敬虔主義時代に執筆された形而上学的著作としては、『筆者の教説の告白（Confessio doctrinae suae）』[49]（1695 年）、および『精神の本質、すなわち、自然科学および倫理学の基礎的理論の探究（Versuch vom Wesen des Geistes）』（1699 年）[50]がある。後者においては、アニミズムが論じられる。ベックによれば、この本こそその後数十年間、トマジウスをドイツ哲学における重要人物たらしめたのである（Beck[1969:252]）。

1705 年には、『神の法学』に続く、自然法論の主要著作が出版される。『自然法と国際法の基礎論（Fundamentum juris naturae et gentium ex sensus communi deducta）』[51]（1705 年）である。この書は『神の法学』の改訂版と言える。トマジウスはその中で、『神の法学』において支持していたプーフェンドルフを批判するに至る。副題を含めたタイトルは「共通感覚から導かれる自然法と国際法の基礎論：本書では至る所で、誠実性と正義と礼節が区別される。これには神の法学の修正が付されている」となっているように、本書でトマジウスは共通感覚に訴えかける。他方で、この副題からみてとれるように、トマジウスは実践的命令を「誠実性（Ehrlichkeit=honestum）」「正義（Gerechtigkeit=justum）」「礼節（Anständigkeit=decorum）」という三つの領域に分類した[52]。この書において道徳（誠実性）と法（正義）を内的強制と外的強制によって明確に区別したことは、後世に大きな影響を与えた。ただし、繰り返しになるが、この時期にあってさえ、トマジウスは法学についてはドイツ語ではなく、まずラテン語で執筆していることは記しておこう。

次の年の 1706 年には、ライプニッツの推薦により、ヴォルフがライプツィヒ大学からハレ大学に数学講座の教授として移ってくる。ヴォルフはさらに 1709 年以降には論理学、形而上学、倫理学の講義も担当する。当時学長であったシュトリクの死を受けて、1710 年にトマジウスはハレ大学の学長（Direktor）に就任している。後にハレ大学において敬虔主義者と対立したヴォルフは、1723 年プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世の勅令によりハレを追われる。ヴォルフはマールブルグ大学哲学教授に招聘される。ベック曰く、トマジウスはヴォルフの追放に際しては「奇妙なことに中立的」（Beck[1969:253]）であったらしい。この時期にはトマジウスはヴォルフの

[49] ドイツ語版が『ドイツ語小論集』に所収されている。
[50] 同年にドイツ語版が出版されている。
[51] ドイツ語版が 1709 年に出版されている。
[52] この点は福田[2004]が詳しい。

知性主義にも敬虔主義の反知性主義にも反対であったが、それでもハレ大学の「哲学する自由（libertas philosophandi)」（Beck[1969:253]）を擁護したのである[53]。

トマジウスは 1728 年 9 月 23 日に亡くなるまでハレ大学の教授、および学長を務めた。カントが 4 歳の頃である。

6. トマジウスの影響

それでは、トマジウスは哲学史においてどれほど名を遺したのだろうか。本節ではトマジウスの影響について可能な限り把握できたことを記しておこう。

トネリは、敬虔主義におけるトマジウスの影響を紹介している（Tonelli[2006:442]）。トマジウスの思想は、後に公式な敬虔主義哲学となった。特にヨアキム・ランゲ（Joachim Lange; 1670-1744）はトマジウスの敬虔主義を推し進めた。ランゲは 1709 年にハレ大学神学部の教授となる。ランゲは当時の新星ヴォルフに初めて噛みついた人物であった。こうして、1710 年までにはほぼドイツ中の大学においてトマジウス主義者がアリストテレス主義者に取って代わった。1730 年以降にはヴォルフ哲学が主流になるが、それでも敬虔主義者は残っていた。その後、アドルフ・ホフマン（Adolf Friedrich Hoffmann; 1707-1741）やクリスティアン・クルジウス（Christian August Crusius; 1715-1775）といった敬虔主義者が 1760 年以降のドイツ哲学の刷新の一翼を担った。現代でもクルジウスは、ライプニッツ＝ヴォルフ哲学を痛烈に批判したトマジウス主義者として認知されていると言ってよいだろう。

赤沢は、先述したトマジウスの「文芸共和国」の理念を継承した四人のトマジウス主義者を挙げている（赤沢[1998]）。ヨハン・ツァイトラー（Johann Gottfried Zeidler; 1655-1711）は在野の学者であり、牧師の職を辞してハレに移り住んだ。ツァイトラーはトマジウスの著作をいくつかドイツ語に翻訳しているが、特に『魔術の罪について』を翻訳したことで知られる。ニコラウス・グルントリング（Nikolaus Hieronymus Grundling; 1671-1729）は家庭教師としてハレを訪れるが、トマジウスにその才能を見出され、法律学に転向する。トマジウスの愛弟子となったグルントリングは、1702 年に『新雑話（Neue Unterredung)』という批評誌を創刊する。クリストーフ・ホイマン（Christoph August Heumann; 1681-1764）は、ゲッティンゲン大学において学び、トマジウスとは書簡を交わす程度の関係であったが、「トマジウス主義者（Thomasianer)」と自称した。ホイマンの『文芸共和国概観、あるいは文芸史への道（Conspectus reipublicae literariae sive via ad historiam literariam)』（1718 年）は当時、よく読まれたようである。ちなみに、1737 年にゲッティンゲン大学を設立したミュンヒハウゼン男爵（Gerlach Adolf Freiherr von Münchhausen; 1688-1770）は若い頃、トマジウスとグルントリングの教えを受けている（赤沢[1987:11]）。クリスティアン・リスコ（Christian

[53] ちなみに 1714 年頃にトマジウスはフランケと和解している。

Ludwig Liscow; 1701-1760）は、痛烈な風刺家として活躍した。リスコはある著作において、トマジウスによる文芸共和国と酷似した表現を書き残している。

次に、ベックによればトマジウス哲学は、二つの時期に、そして、二つのグループに対して影響を与えた（Beck[1969:255-256]）。まず、大体 1710 年から 1750 年まで、トマジウスの敵であるヴォルフ哲学が主流であった時期である。この時期には、敬虔主義に影響を受け、ヴォルフ主義の知性主義に反対してトマジウス哲学を支持する人々が存在した。彼らは「トマジウス学派」と呼ばれ、ハレとライプツィヒを主な活動地としていた。ベックはそのメンバーとしてヨハン・ブッデ（Johann Budde; 1667-1729）、アンドレアス・リューディガー（Andreas Rüdiger; 1673-1731）[54]、そして先述のホフマンとクルジウスを挙げている（Beck[1969:255, 297]）。他方で、ヴォルフ学派の影響が弱まった 18 世紀中葉、主にゲッティンゲンとベルリンで活動した「通俗哲学者」が登場する。彼らはトマジウス哲学を使ってヴォルフ主義者のスコラ主義に反抗したのである。ただし、ベックによれば、彼らの主張にトマジウス自身の哲学の直接的な影響を見出すことは困難である。また、トマジウスの影響は、1770 年にはじまる別の潮流に見出されうる。ヴォルフ学派の知性主義と通俗哲学のジャーナリズムに反して、非理性主義的な思想家が「反啓蒙」運動を始動する。この非理性主義的な思考は、敬虔主義に端を発するのである。ベックの記述は曖昧であるが、この敬虔主義的思考をトマジウス的な思考と理解するべきなのであろう。さらにこの運動はヘルダーを経てロマン派自然哲学へと流れ込む。こうしてベックは以下のように結論づけている。「[……] ドイツにおける 18 世紀の思想のほとんどの部門の源泉は、ヴォルフに由来しえないのであれば、トマジウスの哲学にあるのだ」（Beck[1969:256]）。言うまでもなく、18 世紀とは、カントやメンデルスゾーンが活躍した世紀である[55]。

---

[54] シュナイダースもブッデとリューディガーをトマジウスの信奉者として挙げている（Schneiders[1990:115], 翻訳書 134 頁）。

[55] ハカンセンはトマジウスの学生や弟子として、先述のグルントリングとブッデの他に、ヨハン・ルートヴィヒ（Johann Peter von Ludwig; 1668-1743）を挙げ、トマジウスはゲッティンゲン大学ではヨハン・シュマウス（Johann Jakob Schmauß; 1690-1757）、ゴットフリート・アッヘンヴァル（Gottfried Achenwall; 1719-1772）のような法学者に影響を与えたと指摘している。しかし、彼らはヴォルフ学派のような学派を形成することはなかった。ヴォルフ学派が世を席捲していたので、トマジウスを支持するのは難しかったからではないか、と指摘している（Haakonssen[1997:379]）。この点は、「トマジウス学派」が存在したとする先述のベックの記述とは異なる。さらに、ビネートは、トマジウスは同世代人にはよく言及されたが、後世によっては忘れ去られたと指摘している。「トマジウスは、学者として自身の師匠の理念を引き継いだ学生をほとんどもたなかった」（Bienert[1934:73]）。「しかし、彼の本来的な哲学的著作はまったく共鳴、模倣、論争さえも引き起こさなかった。我々が確証しうるのは、これに関する冷ややかな沈黙である」（Bienert[1934:74]）。ただし、ビネートはその際、あくまで直接的な影響を念頭に置いているように思われる。「直接的な」影響ということを無視した場合ということであろうか、ビネートはヨハン・ゴットシェート（Johann Christoph Gottsched; 1700-1766）や先述のクルジウスをトマジウスの精神を受け継ぐ者として挙げている。ただし、トマジウスが当時も死後も「学派」を形成しなかったことは、反党派哲学の精神と合致していると言える。

最後に、政治的な影響についても一言添えておこう。ビネートいわく、かのフリードリヒ大王（1712-1786 年。在位：1772-1786 年）はトマジウスを賞賛した（Bienert[1934:77-78]）。就任三日後の彼の最初の文化的行為は、拷問、異端審問、魔女裁判の禁止であった。これらの処置は明らかにトマジウスに依拠している。1757 年には「よい教授を見つけるのは難しいことだ。トマジウスはその一人だった」[56]と述べた。また、フリードリヒ大王は以下のように言い残したとされる。

> 大学には学識あるがペダンティックで物知りぶった教授がいたが、洗練された者は誰もこれらの不作法な人々と付き合うことはできなかった。二人だけ例外がおり、彼らはその天賦の才によって国民の名誉となった。偉大なライプニッツと学識あるトマジウスである[57]。

7. 著作とその翻訳について

本節では、トマジウスの著作とその翻訳について記しておこう。長い間、決定的なトマジウスの全集や選集といったものは存在せず、『フランス人の模倣論』などの主要著作の一部が単体で出版されたにすぎなかった。

ところが、この状況を変えたのが Georg Olms 社による、*Christian Thomasius, Ausgewählte Werke*（1993-）の刊行である。編集は本稿 1 節で紹介した、ドイツ啓蒙主義研究の権威であるヴェルナー・シュナイダースが務め、現在までに 24 巻が刊行されている。巻毎に専門家（多くの場合シュナイダース）による「前置き（Vorwort）」、および（原著の索引の直後に）本選集独自の索引が付け加えられている。

トマジウスはラテン語で出版した著作を後にドイツ語でも出版しているが、この選集ではラテン語版とドイツ語版の両方を収めている。例えば、第一巻は『宮廷哲学入門』のラテン語版（1688 年）、第二巻はドイツ語版（1712 年）を収めている。グルネートとの面談（本稿 9 節参照）によれば、選集は未完であり、続編の計画はあるものの、出版社との問題を抱えており、刊行が中断しているとのことである。トマジウスが残した文献をすべてリストアップした Lieberwirth[1955]を見れば明らかだが、トマジウスは書簡を含めて大量の原稿を残しており、それらをすべて公刊するのには長い年月が必要とされるだろう。

また、どれほどの影響を受けたのかは未知であるが、ゲーテとシラーがトマジウスに並々ならぬ関心を寄せていたことが記録されている。Bienert[1934:77-78], 赤沢[1987:2]参照。

[56] ビネートはフリードリヒ大王の発言について以下の資料を挙げている。*Oeuvres de Frédéric II.,* Berlin, 1789. しかし、筆者はこの文献にアクセスすることができなかった。

[57] Wolf[1951:414], Beck[1969:255]. ただし、このどちらの文献も、かのフリードリヒ大王の発言のリソースを示していない。

今のところ、この選集が決定版であるが、リプリントであるがゆえ、いくつかの問題を残している。例えば、髭文字であるのに加えて、しばしばインクがにじんでいたり、シミが残っていたりして、識別困難な箇所が存在する。

『フランス人の模倣論』はいくつかの出版社から単発で出版されており、Reclam 文庫としても出版されているが、現在では入手困難である。この Reclam 版を代表として、トマジウスのテキストには髭文字から現代文字に変更されているものもわずかながら存在する。

最後に、現在トマジウスの主要著作のほとんどはインターネット上でデジタル画像として無料で閲覧できることも付け加えておこう。ただし、その画像は非常に不鮮明で読みにくいと言わねばならないだろう。また、Kessinger Legacy Reprint や Hause からリプリント版が出版されているが、先の選集と比べても文字の不鮮明さや書き込みが目立ち、しばしばまったく解読できない箇所がある。

次に、翻訳について述べておこう。Natural Law and Enlightenment Classics シリーズ（Knud Haakonssen 編集）から二つの英訳版が出版されている（Thomasius[2007] [2011]）。まず、*Essays on Church, State, and Politics* と題されたコレクションが 2007 年に出版されている（Ian Hunter, Thomas Ahnert, Frank Grunert 翻訳）。この論文集には、6 つの論文、例えば『グロティウスまでの自然法の歴史について』や『魔術の罪について』などが収められている。

次に、同じく Natural Law and Enlightenment Classics シリーズの一巻として、2011 年に『神の法学』の英訳が出版された（Thomas Ahnert 翻訳）。これは『神の法学』の全訳と『自然法と国際法の基礎論』からの一部抜粋（特に前者との違いが顕著なテキスト）を加えた書である。どちらのテキストもラテン語版からの翻訳である。

トマジウスの書簡についてもいくつかの版で出版されている。まず、比較的古い時期から存在するものとして、プーフェンドルフからトマジウスへの書簡が 1897 年に出版されている。現在、比較的入手し易いのはそのリプリントである（Pufendorf[1980]）。ただし、トマジウスからプーフェンドルフへの書簡は失われている。また、本稿 5 節でも参照したが、プーフェンドルフ全集の第一巻には書簡が収められており、これもプーフェンドルフからトマジウスへの書簡を含んでいる（Pufendorf[1996]）。さらに近年、トマジウス宛書簡を集めた分厚い資料が二巻、公刊された（Thomasius[2017][2020]）。これにはプーフェンドルフのみならず、フランケやシュペーナー、出版関係者、家族・親族、さらには時の選帝侯などとの書簡、そして詳細なコメンタリーも含まれている。これらの二巻は 1679 年から 1698 年の書簡を網羅しているが、このシリーズにはまだ続編が予定されている。

父ヤーコプについては、Olms-Weidmann 社から 7 巻の全集（Gesammelte Schriften）がすでに出版されている。また、1663 年から 1672 年までのライプニッツとヤーコプ

との往復書簡（フランス語）も出版されており、これには詳細なコメンタリーも付されている（Leibniz-Thomasius [1993]）。さらに、その一部の邦訳が『ライプニッツ著作集Ⅱ-1：哲学書簡　知の綺羅星たちとの交歓』（工作社、2015 年）に収録されている。

最後に、残念ながら、現在のところトマジウスの著作は一つも日本語に訳されていない。

8. 研究の現状

トマジウス研究は、先述の選集の出版によって前進してきており、これからますます前進することが期待される。まず、ミュンスター大学哲学教授ヴェルナー・シュナイダース（1932-2021 年）の一連の研究はトマジウス研究の登竜門となろう。特に、シュナイダースの『自然法と愛の倫理：クリスティアン・トマジウスに関する実践哲学の歴史について』（1971 年）は現在でも色あせないトマジウス実践哲学の古典的研究である。残念ながら、シュナイダースは 2021 年に亡くなっている。

また、トマジウス研究論集もいくつか出版されている。ここでは以下の三つを挙げておこう。

Christian Thomasius, 1655-1728 : Interpretationen zu Werk und Wirkung, mit einer Bibliographie der neueren Thomasius-Literatur, (hrsg.) Werner Schneiders, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1989.

Christian Thomasius (1655-1728) : neue Forschungen im Kontext der Frühaufklärung, (hrsg.) Friedrich Vollhardt, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1997.

Thomasius im literarischen Feld: neue Beiträge zur Erforschung seines Werkes im historischen Kontext, (hrsg.) Manfred Beetz und Herbert Jaumann, Tübingen: Niemeyer, 2003.

これらすべてにおいて、ハレ大学のフランク・グルネートがトマジウス研究の文献リストを付しており、大変参考になる。トマジウス研究の普及という観点からは、このような論集が英語、あるいは日本語でも出版されることが期待される。

また、トマジウスを全面的に扱っているわけではないが、部分的にでも扱っている哲学史の教科書としては、ヴントの『啓蒙の時代におけるドイツ学校哲学』（1964 年）、ベックの『初期ドイツ哲学』（1969 年）、シュナイウィンドの『自律の創成』（1998 年）を挙げておきたい[58]。

『初期ドイツ哲学』は、ドイツ啓蒙の確立者として、トマジウスとヴォルフを挙げている。『啓蒙の時代におけるドイツ学校哲学』はトマジウス以降のドイツ啓蒙思想を

[58] Wundt[1964], Beck[1969], Schneewind[1998].

網羅的に論じたものである。両文献はトマジウスの伝記から倫理学などの個別分野まで、比較的広範な内容を扱っている。また、先述のトマジウスに影響を受けた哲学者も多く取り上げている。

これに対して、『自律の創成』は、トマジウスの自然法論のみを主題としている。特に、ロックを「神の意志が道徳的属性の起源である」という意味において主意主義と位置づけ、これを否定した人物として（『自然法と国際法の基礎論』の）トマジウスを挙げている。日本語訳が存在する点において本書は貴重であるが、他の分野に関する記述や伝記的な記述は含んでいないという難点がある[59]。

日本では、法学分野を別にすれば、トマジウスを専門とする研究者はほぼ皆無に近いと言っていいだろう。唯一挙げ得るのは、赤沢元務および福田喜一朗である。赤沢はドイツ思想史、福田はカントの研究者である。福田は哲学、赤沢は思想史の観点から、非常に高水準の研究論文を発表している。

9. ハレとライプチィヒを訪ねて

筆者は 2023 年の 9 月、ハレとライプツィヒを訪ねる機会に恵まれた。最後に、この旅において発見することのできたトマジウスの軌跡を記しておきたいと思う。

まず、ハレの学術の中心は、フランケ財団（Franckesche Stiftung）とハレ大学[60]である。特にハレはフランケ財団の町という印象だった[61]。言うまでもなく、あの敬虔主義者のフランケに由来する。財団はいくつかの学校を運営しており、敷地内では常にはしゃぎまわる子どもが見受けられた。財団の広大な土地は 50 棟以上の建物を擁する。

1698 年に作られたとされるバロック建築の大きな建物は、当時は孤児院（Waisenhaus）として使われていたが、現在は博物館となっている。展示品は主に財団および敬虔主義の歴史に関するものである。当時流通していたヴォルフの著作や、ヴォルフからフランケへの書簡なども展示されていた。ここでトマジウスの展示物が見られなかったのは意外であった。また、孤児院図書館は、17 世紀末に作られた。その蔵書は 1728 年以降、敷地内の「歴史図書館」に保管されている。この「バロック式劇場」を彷彿とさせる美しい図書館は現存するドイツ最古の公共図書館として、フランケ財団において最も有名な観光スポットとなっている。

---

[59] 三つの教科書に共通しているのは、このうちどれもが古代ギリシアから現代までの西洋哲学史を網羅的に扱うものではない、という点である。むしろ、そのような網羅的な教科書においてトマジウスは言及されていない。これは、トマジウスがどれだけマイナーな哲学者と捉えられてきたかを示しているだろう。

[60] これは現在の正式名称ではないが、ここでは便宜上、トマジウスの時代と同様に、「ハレ大学」という呼称を使用する。実際、現在でも本大学は「ハレ大学（Uni Halle）」と呼ばれることが多い。

[61] 以下の記述は、財団発行のパンフレット（Franckesche Stiftungen Sehenswürdigkeiten）を参考にしている。

フランケの住家とされている建物の中には案内所と小さな展示室がある。筆者は案内所スタッフの尽力のおかげで、町にトマジウスの墓地があることを知った。市立墓地（Stadtgottesacker in Halle）の 10 番はトマジウスの墓である。墓地はアーチ型の部屋のようになっており、二つの石碑が横たわっていた。そのアーチの上部には以下のように記されていた。

> Die Studenten sassen zu seinen Füssen. Er wies ihnen als Lehrer und Freund/Kämpfer und Visionär den Weg zur Glückseligkeit: Bildung und Sprache/Anstand und Manieren/Vernunft und Pflichterfüllung.

個人的には、「闘士」としてのトマジウスが、権威の象徴であるガウン（Taler）ではなく、騎士の恰好をして講義をしていた姿と重なり合った。

ハレ大学は旧市街の坂を少し上ったところにある。大学講堂（Aula der Universität）の中央階段を上がったところに堂々と鎮座しているのがトマジウスの胸像であった[62]。また、Thomasianum と名づけられた法学部校舎は、大学内にあった案内板によれば、1910 年から 1911 年にかけて、Robert Huber と Georg Thür によって建てられた。ハレ大学初の法学者トマジウスに肖ったものである。

フランケ財団の敷地内には、ハレ大学の「ヨーロッパ啓蒙研究学際センター（Interdisziplinäres Zentrum für die Erforschung der Europäischen Aufklärung (IZEA)）」がある。フランケ財団とハレ大学は現在も密接な協力関係にあるらしい。このセンターこそ、ドイツ啓蒙思想研究のメッカと言ってよいであろう。筆者はその主要メンバーであるフランク・グルネート氏と、センター内にある氏の研究室において面談することができた。本稿でしばしば「グルネートとの面談」と記したのは、この面談を指している。グルネートは非常に気さくな方で、どこの馬の骨かわからない筆者に対しても熱心に話してくださった。トマジウスに興味を持つ日本の研究者が物珍しかったのであろうか。あるいは、単に「希少なトマジウス仲間」という意識もあったのかもしれない。氏はセンターの図書室を案内してくれた後、センターの他のメンバーに筆者を紹介してくれた。最後に、自身の著書に加えて、トマジウス選集のいくつかの巻を譲ってくださった。氏は当選集に永らく携わっており、コピーをいくつも持て余していたのだろうか。氏は現在、シュナイダースに代わってその編者を務めている。

また、ハレと言えばかの作曲家ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（Georg Friedrich Händel: 1685-1759）が生まれ育った町としても有名であるが（旧市街の中心にはヘンデルの像が立っている）、ヘンデルハウスにはトマジウスの肖像画（Anonymer

[62] 残念ながら、大学博物館は休館中であった。

Kupferstich BS-III, 348)が展示されている[63]。ヘンデルは 1702 年にハレ大学(法学部？)に入学したとされるが、トマジウスとの関係は定かではない。

旧市街を歩いていると、少し奇妙な像が目に入った。近寄ってみると、それはおよそ哲学者には見えない、薄着のヴォルフ像であった。そしてその後ろにある建物は、ヴォルフが 1741 年から 1754 年まで住んだ家であった。今は博物館（Stadtmuseum）となっている。筆者が訪ねた時には、「社交性と哲学する自由(Geselligkeit und die Freiheit zu philosophieren)」というタイトルの展示会が催されていた。特にヴォルフゆかりの事物が展示されているわけではなかったが、ヴォルフの生涯や思想が紹介されており、トマジウスも漏れずに紹介されていた。

ハレ中央駅の近くには、壁一面に町に貢献した人物のパネルが数十枚貼られている。筆者はハレを去る際に、フランケやヴォルフと共に、トマジウスのパネルを見つけて安心したことを覚えている。トマジウスについては、何かの肖像画から取ったのであろうか、トマジウスの目をアップしたイメージの隣に、「哲学者、法学者、教授、初期啓蒙家、大学の設立者」と説明されていた。

対して、ライプツィヒはどうだろうか。中央駅前にある、ライプツィヒ大学の近年建て替えられたモダンな新校舎の中には、ライプニッツ、ゲーテ、レッシングの白い胸像がある。また、大学中庭にあるライプニッツ像は有名であろう。この新校舎から少し歩いたところに古い校舎があり、哲学部はここに置かれている。ライプツィヒ大学哲学部では今や分析哲学が中心であり、カントでもヘーゲルでも、分析哲学的に論じるのが主流となっている。

ライプツィヒには、「トマジウス・クラブ（Thomasius Club)」と呼ばれる集まりが存在する。ホームページ[64]によれば、このクラブは 2006 年に設立され、トマジウスに肖って名づけられた。トマジウスを研究する会などではなく、毎回ゲストを迎え、学術的なテーマに関する約一時間の議論をポッドキャストで配信する会である。「ドイツ語での配信」という点でトマジウスを意識しているらしい。

この旧校舎からさらに西に 10 分ほど歩いたところに、「トマジウス通り」がある。ほとんど人をみかけないような、小さく、短い通りである。トマジウス通りはゴットシェート通りと交差している。さらに、ライプニッツ通りとトマジウス通りが直線上でぶつかるところにトラムの駅がある。正確にはどちらの通りにも位置しないのだが、その駅は「トマジウス通り駅」ではなく、「ライプニッツ通り駅」と名づけられている。

ライプツィヒにおいて筆者が見つけたトマジウスの唯一の軌跡（？）は、このトマジウス通りとトマジウス・クラブだけであった。言うまでもなく、両者において「トマジウス」とはただの名前の借用にすぎない。ハレとライプツィヒの非対称性は、絵

[63] なお、トマジウスの肖像画については、Fleischmann[1931]で網羅的に紹介されている。
[64] https://www.thomasius-club.de/club/（最終閲覧 2023/11/01）

に描いたようにわかりやすかった。ライプツィヒはトマジウスを追放した町だからであろうか[65]。

文献表

・トマジウスの文献（選集を除く）

Thomasius, Christian. [2007] *Essays on Church, State, and Politics*, edited, translated, and with an introduction by Ian Hunter, Thomas Ahnert, and Frank Grunert, Natural Law and Enlightenment Classics, Indianapolis: Liberty Fund.

——— [2011] *Institutes of Divine Jurisprudence with Selections from Foundations of the Law of Nature and Nations*, edited, translated, and with an introduction by Thomas Ahnert, Natural Law and Enlightenment Classics, Indianapolis: Liberty Fund.

——— [2017] *Christian Thomasius Briefwechsel Band 1: 1679–1692*, (Hrsg.) Frank Grunert, Matthias Hambrock und Martin Khnel, unter Mitarbeit von Andrea Thiele, Berlin: De Gruyter.

——— [2020] *Christian Thomasius Briefwechsel Band 2: 1693–1698*, (Hrsg.) Frank Grunert, Matthias Hambrock und Martin Khnel, unter Mitarbeit von Andrea Thiele, Berlin: De Gruyter.

・外国語二次文献

Ahnert, Thomas. [2006] *Religion and the Origins of the German Enlightenment: Faith and the Reform of Learning in the Thought of Christian Thomasius*, Rochester: University of Rochester Press.

Beck, Lewis White. [1969] *Early German Philosophy: Kant and his Predecessors*, Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press.

Bienert, Walther. [1934] *Die Philosophie des Christian Thomasius*, Inaugural-Dissertation, Halle: E. Klinz.

Borinski, Karl. [1894] *Baltasar Gracian und die Hoflitteratur in Deutschland*, Halle a.S. : Max Niemeyer.

Bloch, Ernst. [1953] *Christian Thomasius: ein Deutscher Gelehrter ohne Misere*, Berlin: Aufbau-Verlag.

Deutsche Biographische Enzyklopädie (DBE) [2008] *Deutsche Biographische Enzyklopädie*, 2. überarbeitete und erweiterte Auflage, Bd. 10, (Hrsg.) Rudolf Vierhaus, unter Mitarbeit von Dietrich von Engelhardt et al., München: K. G. Saur.

Dyck, Corey and Sassen, Brigitte. [2021] “18th Century German Philosophy Prior to Kant”, First published Sun Mar 10, 2002; substantive revision Fri Sep 24, 2021, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, (ed.) Edward N. Zalta, URL = 〈https://plato.stanford.edu/entries/18thGerman-preKant/〉.（最終閲覧 2023/10/28）

Fleischmann, Max. (Hrsg.) [1931] *Christian Thomasius: Leben und Lebenswerk, Abhandlungen und Aufsätze*, Halle (Saale): Max Niemeyer.

Grunert, Frank. [1997] “Zur aufgeklärten Kritik am theokratischen Absolutismus: Der Streit zwischen Hector Gottfried Masius und Christian Thomasius über Ursprung und Begründung der summa potestas”, *Christian Thomasius (1655-1728): Neue Forschungen im Kontext der Frühaufklärung,* (Hrsg.) Friedrich Vollhardt, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, pp. 51-77.

Haakonssen, Knud. [1997] “Thomasius (Thomas), Christian (1655–1728)”, *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, (ed.) Edward Craig, vol. 9, London: Routledge, pp. 376b-380b.

[65] ただし、言うまでもなく、ライプツィヒにおけるトマジウスの軌跡については筆者の調査不足もありうることは付け加えておきたい。例えば、帰国後に知ったことだが、Fleischmann[1931]によれば、ライプツィヒ大学の講堂にはトマジウスの白い胸像が置かれていた。ただし、校舎が建て替えられた現在では、それがどこに置かれているのかは定かではない。ちなみに、筆者が訪ねた時に大学の博物館は閉館していた。

Kühlmann, Wilhelm. [1982] *Gelehrtenrepublik und Fürstenstaat: Entwicklung und Kritik des deutschen Späthumanismus in der Literatur des Barockzeitalters*, Tübingen: M. Niemeyer.

Leibniz-Thomasius. [1993] *Correspondance Leibniz-Thomasius 1663-1672*, texte établi, introduit, annoté et commenté par Richard Bodéüs (Bibliothèque des textes philosophiques, textes et commentaires), Paris: Librairie Philosophique J Vrin.

Lieberwirth, Rolf. [1953/1954] "Christian Thomasius' Leipziger Streitigkeiten", *Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther-Universität, Reihe 3*, Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe, Halle a.s. : Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg, pp. 155-159.

——— [1955] *Christian Thomasius: sein wissenschaftliches Lebenswerk : eine Bibliographie*, Weimar: H. Böhlau.

Pufendorf, Samuel. [1980] *Briefe Samuel Pufendorfs an Christian Thomasius, Pufendorf-Briefe an Falaiseau, Friese und Weigel*, Meisenheim: Scriptor.

——— [1996] *Samuel Pufendorf. Briefwechsel*, (Gesammelte Werke / Samuel Pufendorf, herausgegeben von Wilhelm Schmidt-Biggemann, Bd. 1), (Hrsg.) Detlef Dörig, Berlin: Akademie-Verlag.

Schneewind, J. B. [1998] *The Invention of Autonomy: A History of Modern Moral Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press. （ジェローム・B・シュナイウィンド『自律の創成：近代道徳哲学史』田中秀夫監訳、逸見修二訳、法政大学出版局、2011 年。）

Schneiders, Werner. [1971] *Naturrecht und Liebesethik: zur Geschichte der praktischen Philosophie im Hinblick auf Christian Thomasius*, Hildesheim: G. Olms.

———[1974] *Die wahre Aufklärung: zum Selbstverständnis der deutschen Aufklärung*, Freiburg: Alber.

———［1983] *Aufklärung und Vorurteilskritik: Studien zur Geschichte der Vorurteilstheorie*, Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann-Holzboog.

———[1990] *Hoffnung auf Vernunft: Aufklärungsphilosophie in Deutschland*, Hamburg: Felix Meiner Verlag. （ヴェルナー・シュナイダース『理性への希望：ドイツ啓蒙主義の思想と図像』村井則夫訳、法政大学出版局、2009 年。）

———[1997] *Das Zeitalter der Aufklärung*, München: C.H. Beck.

Schneiders, Werner and Zurbuchen, Simone. [2003] "Thomasius, Christian (1655-1728)", *Encyclopedia of the Enlightenment*, (ed.) Alan Charles Kors, vol. 4, New York: Oxford University Press, pp. 161a-162b.

Schröder, Peter. [1999] *Christian Thomasius zur Einführung*, Hamburg: Junius.

Tonelli, Giorgio. [2006] "Thomasius, Christian (1655-1728)", *Encyclopedia of Philosophy*, (ed.) Donald M. Borchert, vol. 9, 2nd ed, Detroit: Macmillan Reference USA, pp. 440b-442a.

Wolf, Erik. [1951] *Grosse Rechtsdenker der deutschen Geistesgeschichte*, Tübingen: J.C.B. Mohr.

Wundt, Max. [1939] *Die deutsche Schulmetaphysik des 17. Jahrhunderts*, Tübingen: Verlag von J.C.B. Mohr.

———[1964] *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*, Hildesheim: G. Olms.

・日本語二次文献

エンゲルハート・ヴァイグル [1997] 『啓蒙の都市周遊』三島憲一・宮田敦子訳、岩波書店。

赤沢元務 [1987]「Chr.トマージウス：1687 年の講義案内書」『千葉工業大学研究報告人文編』第 24 号、pp. 1-15。

———[1989]「Leibniz と Thomasius：Ermahnung an die Teutsche の成立年をめぐって」『千葉工業大学研究報告人文編』第 26 号、pp. 3-20。

———[1998]「レスプブリカ・リテラリアとドイツ初期啓蒙主義：Chr.トマジウスを中心に」『千葉工業大学研究報告人文編』第 35 号、pp. 21-36。

坂本貴志 [2021]「世界知と哲学：トマージウスからドイツ啓蒙へ」『未来哲学』第 2 号、未来哲学研究所、pp. 178-196。

成瀬治 [1988]『伝統と啓蒙：近世ドイツの思想と宗教』法政大学出版局。

西村稔 [1998]『文士と官僚：ドイツ教養官僚の淵源』木鐸社。

福田喜一郎 [2000]「クリスチャン・トマージウス宮廷哲学：ドイツ啓蒙哲学の回顧（一）」『鎌倉女子大学紀要』第7号、pp. 1-10。
———[2004]「行為の規範としての礼節（decorum）の意義：クリスチャン・トマージウスにおける法・道徳・礼節の区別」『近世哲学研究』（京大・西洋近世哲学史懇話会）第10号、pp. 44-63。

付記：本稿は公益財団法人上廣倫理財団研究助成（助成タイトル「C. トマジウスによる社交論の研究」）による研究成果の一部である。

The Life of Christian Thomasius

Yuki TAKAKI

In the field of philosophy, the German Enlightenment is usually associated with the late 18th century, when Moses Mendelssohn (1729-1786) and Immanuel Kant (1724-1804) were active. In particular, Kant's article "What is Enlightenment?", published in 1784, has become a classic for German Enlightenment.

However, this period is in fact placed in the late Enlightenment (Spätaufklärung). Werner Schneiders, in his *Hoffnung auf Vernunft* (1990), divides the German Enlightenment into four periods. First, there was the Early Enlightenment from before 1690 to around 1720, the Late Enlightenment from around 1780 to around 1800, and, in between these, the first half (1720-1750) and the second half (1750-1780) of the Peak Enlightenment. On this view, Kant belongs to the last of these periods.

The Early Enlightenment (Frühaufklärung) began with an incident at a university by the philosopher Christian Thomasius (1655-1728), known as the "father of the German Enlightenment". Thomasius posted a lecture pamphlet containing a declaration that he would give his lectures in German at the conservative University of Leipzig, where the tradition of using Latin was taken for granted.

However, the figure of Thomasius has not been in the spotlight enough. In fact, little is known about his life except for his use of German in his lectures. And even if it is pointed out that Thomasius was involved in various scandals at the University of Leipzig, the specifics of those scandals are often glossed over. In light of this situation, this paper will focus on the life of Thomasius. We will find that Thomasius' life was tumultuous, and this tumult seems to be reflected in his writings. Thus, at the same time, the paper is intended as an introduction to the thought of Thomasius.